

保田  
與重郎

王  
子  
之  
書  
卷  
之  
一

大清立縣之印  
穆立憲國至北角  
告巴利文  
大清立縣之印

古月乃一  
東五布定橋上漢合  
二八三四  
任勿興重山

令和八年一月六日（火）

二十九日（木）

あらゆるがんじゆせん  
た、余は之に付けても事  
あすを、もとより、ことと  
ある、たゞ、大へんす、  
て、不、ヨード、文化満座  
は、故にや学校で用ひる事  
が、やがて、やながと席し  
て、の、の、の、の、の、の、  
椅へよした。手は、  
筆記は、山の、傳達の、  
さかへに、難檻へ、も。し  
たが、今もやうこ、も、も、  
や、も、も、も、も、も、も、  
も、も、も、も、も、も、も、

少しまして珠巒に思ひ事  
をのしはてと思ひて  
せりめもるにと申とす  
おが お待し下さり 横面  
あらごとくのとれ、多面  
思ふて、けりをまのほど  
ゆくと おけりゆくと  
下葉子とおれ  
左多子とおれ  
二ノ三日  
保母渡重

## 保田與重郎 (1910-1981)



『保田與重郎全集』第 20 卷より。昭和 19 年頃

奈良県桜井に生る。畠傍中学校（現畠傍高校）卒。旧制大阪高等学校から東京帝国大学文学部に進む。高校時代から文学同人誌『コギト』を主宰し、亀井勝一郎らと昭和 10 年（1935）には『日本浪漫派』を組織する。11 年初の著書『日本の橋』を芝書店から上梓したのを皮切りに、『戴冠詩人の御一人者』『エルテルは何故死んだか』『美の擁護』『後鳥羽院』など、古代を中心に古典を称揚する作品を次々に発表した。幕末の天誅組蜂起に参加した伴林光平の獄中記「南山踏雲録」が広く知られるようになったのも、保田の『南山踏雲録』（小学館、1943）によるところが大きい。戦争が拡大していく中、保田の美文は当時のインテリ青少年に大きな影響を与えた。

橋川文三や三島由紀夫もまたその一人である。

昭和 20 年 3 月病身で召集され中国で終戦を迎える。東京落合の自宅は空襲で焼失していたため、昭和 21~33 年は郷里の実家で生活を送り、以後は京都太秦に身余堂を構えて移り住んだ。

終戦によって、文壇の寵児保田は一転無視されるか、戦争協力者といった罵声が浴びせられる存在となり、昭和 23 年には公職追放となった。しかし、自らが創刊に関わった同人誌『祖国』に依るなどして執筆を続け、いつしか日本浪漫派や保田には再評価の目が向けられるようになった。

戦後の作品に『祖国に祈る』『現代畸人伝』『日本浪漫派の時代』『日本の美とこころ』『わが萬葉集』などがある。没後ほどなく編纂された『保田與重郎全集』全 40 卷に加え別巻 5 卷（講談社、1985-1990）がある他、今回の展示に使用した『保田與重郎文庫』全 32 卷（新学社、1999-2003）もある。

お手紙ありかたう存じまし

た、奈良文化や辰巳先生の

御事など、なつかしいことを

おかげ下さつて、大へんありが

たく存じました、文化講座

が畠傍中学校で開かれた時

私ハ中学生でしたが出席し

て色々の高名の人々の声に

接しました、あの講座と

雑誌は郷土の後進の者を

さかんに鞭撻したものでし

たが、今もやつてゐられるので

せうか、お手紙では、中絶して

ゐるやうにも察せられます

もしさうなら残念に思ひます

なつかしいことを思ひ出しつゝ

とりとめもないことを申しまし

たが、お許し下さい、梅雨

あけころの大和の暑さを

思ひつゝ、御自愛のほど

はるかにお祈り申上ます

昭和十七年六月廿九日

東京市淀橋区上落合

二ノ八三四

保田與重郎



(表紙書簡の翻刻文)

(封筒裏)  
奈良県畠傍町

樺原農園東北角

辰巳利文様

〔17.6.29 消印〕

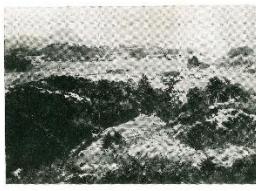
(封筒裏)

六月廿九日

東京市淀橋区上落合

二ノ八三四

保田與重郎



『万葉集の精神』口絵より

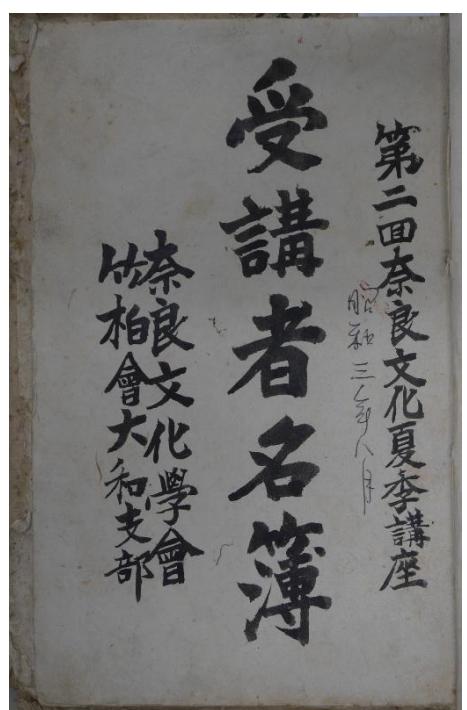
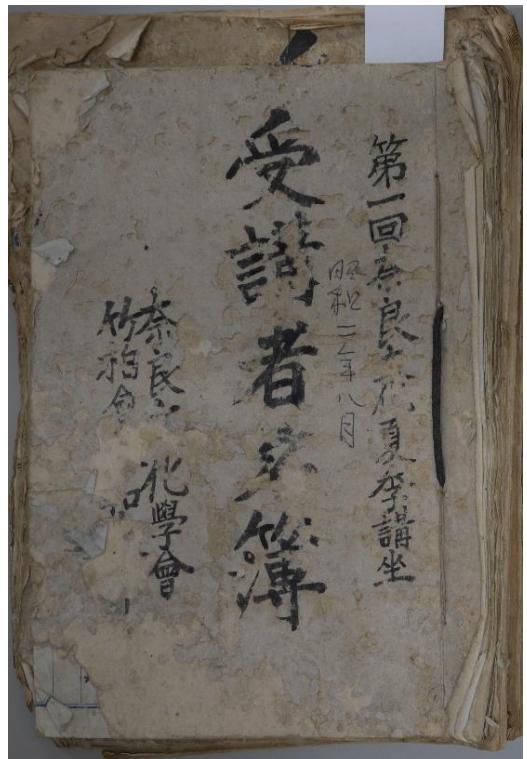
当時 33 歳の保田は昭和 17 年 (1942) 6 月 15 日、ほぼ 20 冊目となる著書『萬葉集の精神：その成立と大伴家持』を筑摩書房から上梓している。書簡の日付は同年 6 月 29 日。両者を結びつけると、この書簡の次のような背景が推察できる。

保田は、早速この 571 頁からなる大著を、少年時代に影響を受けた辰巳に贈呈する。辰巳はこれに対し、近況や回顧を織り交ぜた礼状を送る。その礼状に対する返信が、この書簡というわけである。あくまでも、推察、ではあるが。

辰巳利文 (1898~1983) は小学教員の傍ら、短歌結社竹柏会を主宰する佐佐木信綱に師事し、歌人や研究者としても活躍する。その竹柏会大和支部の機関誌として発行されたのが『奈良文化』で、当初は歌書の性格もあったが、しだいに上代文化研究誌としての性格を強めていくとされる。大正 11 年から昭和 12 年まで発行されていた。

「文化講座」とは、奈良文化学会と竹柏会奈良支部が主催する「奈良文化夏期講座」のこと。万葉集を座学と巡椥によって学ぼうとするもので、教職で多忙な辰巳に代わって、現地を案内するガイドを養成する目的もあったとされる（黒岩康博『好古の瘴氣』慶應大学出版会、2017）。

書簡には中学生の時参加とある。これは昭和 2 年の初回のものだが、裏表紙に掲げた参加者名簿を見ると、保田が大阪高校へ進学した翌 3 年の第 2 回にも参加していることがわかる。



1 新潟縣長岡中學校 教員 真柄米次	10 朝鮮慶寧道公立師範學校 教員 北方榮之助
2 奈良縣高田町立金糸會員 鈴木清太郎	11 奈良縣高田町立金糸會員 喜多奈良右
3 奈良縣高田町立金糸會員 老川三郎	12 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
4 奈良縣高田町立金糸會員 吉川三郎	13 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
5 奈良縣高田町立金糸會員 三錦	14 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
6 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	15 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
7 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	16 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
8 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	17 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
9 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	18 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
10 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	19 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
11 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	20 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
12 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	21 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
13 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	22 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
14 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	23 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
15 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	24 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
16 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	25 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
17 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	26 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
18 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	27 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
19 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	28 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
20 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	29 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
21 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	30 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
22 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	31 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
23 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	32 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
24 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	33 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎
25 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎	34 奈良縣高田町立金糸會員 佐川三郎

